様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：８３５０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７０２３７

研究課題名（和文）戦国大名家臣の関係史料収集と近世的展開に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research of the historical documents concerning the Sengoku Daimyo vassals and their development in the early modern period of Japan.

研究代表者
海老沼　真治（EBINUMA, Shinji）

山梨県立博物館・山梨県立博物館・学芸員

研究者番号：２０５７４１５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦国大名の発給文書に比べて史料収集・分析が十分に進んでいない大名家臣について、甲斐武田氏の家臣を主な素材として、関連史料の掘り起こしを図るとともに、大名と家臣との関係や近世以降の足跡、子孫による系譜編纂等について考察を行った。史料収集では、武田氏関係の新出文書の発見や、原本の再確認ができたものなど、史料の基礎データの充実を図ることができた。そして近世以降の展開については、米沢藩士市川氏（旧武田家臣、先方衆）による文書整理、高崎藩士山本氏（旧武田家臣、足軽大将衆）による系譜編纂等について、新たな知見を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：Studies of historical documents concerning the vassals of the Sengoku Daimyo, the warlords in the early modern period of Japan, has not been progressed compared with those of their boss. This study focused on vassals of the Takeda family, one of the Sengoku Daimyo, from the Sengoku to Edo periods by collecting and analyzing new historical documents.
As results, basic data were developed such as discovery of new documents or reconfirmation of the documents by using original version.
In addition, this study obtained new information of the Takeda family in the early modern periods through analyzing the document arrangement by the Ichikawa family, samurai of Yonezawa domain, and the complication of genealogies by the Yamamoto family, samurai of the Takasaki domain.

研究分野：日本中世史

キーワード：戦国大名　家臣　家伝文書　中近世移行期　武田遺臣

１．研究開始当初の背景

戦国大名研究は、大名発給文書を中心とした関係史料の収集を基礎としており、それ自体が重要な成果として数多くの史料集が公刊されている（先駆的なものに奥野高廣『織田信長文書の研究』吉川弘文館、1970・71年。近年では『戦国遺文』後北条氏編、武田氏編、今川氏編など）。また自治体史においても、各地域の大名関係史料の収集が盛んに行われ、新史料の発見につながるとともに、個別大名研究の進展に寄与している（近年の主な成果として『上越市史』資料編における「上杉氏文書集」、『仙台市史』資料編における「伊達政宗文書」など）。

これら史料収集の中心は大名関係文書であり、大名を支え、大名「家中」の構成員となった家臣の関係史料については、大名に付随する形で収集される程度で、本格的な調査はなされていない場合が多い。このことは特に滅亡・断絶した大名家で顕著な傾向にあると思われる。近世まで存続した大名家の場合、家中における系譜編さん等の過程で家伝文書の書上などが作成されるため、ある程度の史料収集は可能であるが、滅亡した大名家では、まず滅亡後の家臣の足取りを追跡することが困難となる。天正 10 年（1582）に滅亡した甲斐武田氏の場合では、家臣団の一部は水戸徳川家や彦根藩の藩士になっていることが確認されるが、その他の動向はほとんど知られていない状況であった。こうした状況は『山梨県史』資料編（1999～2005 年）、『戦国遺文』武田氏編（東京堂出版、2000～2006年）といった史料収集を経ても大きく進展することはなかった。

しかし近年になり、甲斐武田氏家臣の関係文書、家伝文書が相次いで発見、確認されるようになった。主な事例として、山本菅助家文書（海老沼編『山本菅助の実像を探る』戎光祥出版、2013 年）、三枝家文書（丸島和洋「東近江市能登川博物館寄託「三枝家文書」の検討」〈『戦国大名武田氏と甲斐の中世』岩田書院、2011 年〉）、秋山家文書（小佐野浅子「山形大学附属博物館寄託「秋山家文書」」〈『戦国大名武田氏の役と家臣』岩田書院、2011 年〉）などがある。

研究代表者はこのうち、山本菅助家文書の調査に携わり、「山本菅助」あての武田氏発給文書や、山本菅助の後継者に関する文書などが新たに確認された。これらの新史料により、①これまで疑問とされていた山本菅助の実在が確かめられ、さらに武田氏家臣としての位置づけも検討できるようになった。②山本菅助の子孫が存在し、彼らが近世を通じて武士として存続していた。③山本菅助子孫の仕官には、『甲陽軍鑑』の版行や他の武田旧臣との関わりが大きく作用していた、などの知見が得られ、戦国大名家臣研究に新たな論点を提示した（前掲『山本菅助の実像を探る』）。また研究代表者が所属する山梨県立博物館において、上記研究成果を公開した展示・シンポジウムを開催し、研究者や市民への情報の共有化を図った（山梨県立博物館シンボル展「実在した山本菅助」2010 年 6 月 5 日～7 月 5 日開催、シンポジウム「山本菅助再考」2010 年 6 月 26 日開催）。このように武田氏家臣の関係史料は今後もさらなる発見・再確認が見込まれ、その収集・分析は戦国大名研究の一環として取り組むべき課題のひとつと認知されている。

またこうした大名家臣の近世における動向については、離れた地にいても連絡を取り合い、互いに仕官の紹介や身元の保証をしあうなど、戦国期に形成された関係が近世社会においても有効になっていたことが確認された。このような事例は現在のところ山本家・秋山家など限定的であるが、今後史料収集と分析を進めることによって、さらに多くの具体例を掘り起こすことが可能となる。

以上のことから、戦国大名家臣の史料収集とその分析は、中世から近世へという時代の転換期において、武士の存立の拠り所がどのようなものであったか、また近世社会において、戦国期の家伝文書や人々の結びつきがどのような意義を持つものであったか、という課題の解明にもつながる可能性を有している。

２．研究の目的

本研究では、上記の研究背景から戦国大名の中でも特に甲斐武田氏の家臣を主な素材として、新史料のさらなる掘り起こしを図るとともに、収集した史料をとおして、大名との関係や、近世における家伝文書の位置づけなどを明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の 3 点を特に重視した。

（A）大名家臣の家伝文書の類型化

家臣関係史料を収集し、とくに家伝文書の様式・形態等を把握し、既知の文書との比較等を行うことで、伝来する文書の性格を明らかにするとともに、家臣が大名から受給する文書の類型化を図る。

（B）戦国大名と家臣との関係、大名家中の構成・実態の考察

戦国大名研究は大名による支配のあり方といった視点に加え、地域社会や家臣がいかに大名の支配を受容し、いかなることを大名に求めたか、という点が重視されるようになっている。家臣関係史料は大名から受給した文書が中心になることから、その収集・分析を進めることにより、大名と家臣との関係や、家中における位置づけを明らかにする。

（C）近世社会において前代の人的関係や家伝文書が有する意義の解明

山本菅助家の事例では、戦国期に形成された人的関係が、近世において大名家への仕官にあたり、相互に身元を保証しあう関係として作用していた。史料の収集・分析をとおし

て、このような事例が他にも認められるか、また異なる事例があるかを確認することで、旧戦国大名家臣という立場が近世社会にどのように受け入れられていたかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下の調査・研究を行うこととした。

①甲斐武田氏の家臣を中心とした関係史料の収集を行う。収集には、自治体史等刊本の他、原本調査を実施する。特に新出史料の場合は原本調査が必須となる。家伝文書が存在する場合には、中世文書に加え、可能な限り近世段階の史料まで確認を行う。また所在が判明する場合には、墓石の銘文等の調査も行う。

②収集した史料の目録化、写真撮影および翻刻を行い、分析のための基礎情報の抽出と記録化を図る。

③収集対象となる史料が伝来した地域、対象となる家臣やその子孫が足跡を残している地域について、歴史的環境等を把握するため、現地調査を実施する。

平成 26 年度には、武田氏家臣のうち旗本の構成を示した史料である「武田信玄旗本陣立書」の模本・写本を調査し、山梨県立博物館が所蔵する原本との比較や伝来等の考察を行うための基礎的情報を取得した。

また山梨県立博物館所蔵「市河家文書」（武田氏家臣（先方衆）、後に米沢藩士となる市河（市川）氏の家伝文書の一部）のうち、米沢藩士市川氏が作成した中世段階の家伝文書の写である「古状共写」の調査を行い、同史料作成時における市川氏の家伝文書の構成や、写作成の経緯等についての考察をおこなった。

平成 27 年度には、武田遺臣の由緒を持つ白河藩士市川氏（新潟県立歴史博物館）、福井藩士山県氏（福井市立郷土歴史博物館）、米沢藩士武田氏（市立米沢図書館）の家伝文書について、武田氏発給文書の所在確認や、各氏の系譜等を中心に調査・撮影をおこなった。また博物館収蔵品のうち武田氏家臣に関する資料を中心に写真撮影を行い、関係資料を公開するための整備も行った。

平成 28 年度は、県内の個人所有となっている武田信玄自筆書状（原本再確認）を含む武田氏関係文書の調査・撮影、県外の個人所蔵となっている新出の武田信玄自筆書状の調査・撮影を行うことができた。また上半期には関係資料の撮影を集中的に行ってデータ整備に努めるとともに、武田家臣に関わる基礎資料の一つである「天正壬午起請文」の写本のうち、山梨県立博物館収蔵資料・県内所在資料各１点について翻刻を行った。下半期には山本菅助家文書の追加調査などにより、過去の調査で取得できなかった情報を補うことができた。

平成 29 年度は、これまであまり実施できなかった武田遺臣に関係する現地調査を行ったが、高崎藩士山本氏に関係する地域（群馬県高崎市・新潟県村上市）を訪問するにとどまり、その他家臣に関わる現地調査については今後の課題として残った。新規の資料調査としては、郡内小山田氏が武田氏と相模北条氏との交渉の取次を行っていたことを示す新出史料の調査を行い、山梨県立博物館の資料収集につなげることができた。

４．研究成果

初年度である平成 26 年度には、研究論文 2 本、資料紹介１本、シンポジウム発表１本の成果を得た。論文「武田・徳川氏の今川領国侵攻過程―身延文庫「科註拾塵抄」奥書の検討から―」（『武田氏研究』51 号）において、武田・徳川領氏の今川領国侵攻における遠江・駿河の状況や政治・軍事情勢について、新史料の分析を通して新たな知見を提示することができた。「市河家文書「古状共写」について」（『山梨県立博物館研究紀要』第 9 集）では、武田旧臣の米沢藩士市川氏が所蔵する家伝文書の写について、その成立過程等を考察し、米沢藩士市川家による家伝文書の所持状況の一端を明らかにすることができた。シンポジウムは、長野県飯山市で開催された飯山城シンポジウムにおいて「御館の乱・甲越同盟と武田氏の飯山支配」を発表し、武田氏が支配した飯山領とその担い手となった家臣についての考察を試み、甲越同盟締結後の飯山城とその支配領域においては、信濃衆を中心とした支配が展開された可能性を提示した。

平成 27 年度には、図書への執筆１本に加え、年度末に特別展「武田二十四将―信玄を支えた家臣たちの姿―」（平成 28 年 3 月 19 日～5 月 23 日）の開催とその展示図録を刊行できたことが最大の成果である。本展では、武田信玄の家臣団を描いた「武田二十四将図」を中心に取り上げながらも、個々の人物に注目するのではなく、描かれた家臣たちの身分に着目し、「御一門衆」「御譜代家老衆」「先方衆」「足軽大将衆」という身分別に関連資料を紹介した。またこの身分に当てはまらない家臣の活動や、武田氏滅亡後の家臣の動向についても重点的に紹介し、近年における戦国大名家臣研究の成果と、本研究の成果を広く発信する機会とすることができた。図書への執筆では、和根崎剛編『資料で読み解く真田一族』（郷土出版社）への分担執筆として、武田氏に従属する前後の時期における真田氏の動向について、先行研究の成果によりながら概観した。

平成 28 年度は、前半には上記「武田二十四将展」の講演会として、研究協力者にも依頼して成果をわかりやすく発信する講座を開催し、研究代表者自身も「武田氏滅亡後の家臣の動向」をテーマに講演を行った。論文

では、地方史研究協議会の地域大会「「境」と「間」の地方史－信越国境の歴史像－」（平成28年10月15日～17日開催）にあたって、問題提起「川中島合戦と信越国境」（『地方史研究』383号）を寄稿し、甲斐武田氏と当該地域の国衆との関係を考察した。また資料紹介としては、「武田二十四将展」開催にあたって調査した古文書について、その詳細データの報告を行った（海老沼「「武田二十四将展」展示資料の法量詳細」『山梨県立博物館研究紀要』第11集）。同展準備のための調査では、これまでの文書調査の基本であった料紙・印判の法量計測に加え、花押の計測も可能な限り行った。また新たに原本が確認された文書もあり、既存の資料データに追加するべき情報が多く得られた。展示や図録ではそうした細かい情報まで提示することはできなかったため、別にその成果を公開し、今後の研究に活用していただくための基礎とした。

最終年度となる平成29年度には、本研究の中心としている武田家臣山本菅助家の家伝文書について、特に系図・由緒書など系譜史料の再検討を行い、その成果を「武田氏滅亡後の山本氏－高崎藩士への道程と由緒の形成－」（安中市学習の森ふるさと学習館企画展『山本菅助』展示図録）としてまとめた。山本家に伝わる系譜史料には、比較的近接した2つの時期に作成されたものに大別され、それぞれ作成の契機とその性格が異なることを指摘した。そしてこの両時期に作業を行ったのが同一人物であったことから、この時の系譜編纂作業を通じて、高崎藩士山本家が自家の歴史・由緒をかなり正確に把握することにもつながったことを明らかにした。この成果に関連して、安中市で開催された企画展「山本菅助－真下家所蔵文書の発見－」（平成29年12月2日～平成30年2月26日）では、展示図録への執筆、講演会、企画内容へなどに協力し、成果の還元にも努めた。また前年度に調査した新出文書について資料紹介を行うとともに、そこから読み取れる武田氏の動向等についての新たな視点を提示した（「第四次川中島合戦直前の武田氏－新出の武田信玄自筆書状から－」『戦国史研究』75号）。

これら年度別の成果を総合した、本研究における成果としては以下の点があげられよう。

第一に、「関係資料収集」については、新資料の掘り起こしや、これまで原本が未確認だった資料の調査を数多く行うことができた。また研究代表者が担当した特別展に際しても、多数の武田氏関係資料の原本調査を行うことができ、資料データの拡充が図られた。課題としては、当初計画していた調査を全て完了することができなかったこと、撮影した資料の整理が十分に進まなかったことである。これは調査・撮影の分量が当初の想定を上回ったことが主因であるが、これらのうち特に整理については、研究期間終了後も少しずつ進めていきたい。

第二に、「近世的展開」に関する考察については、前述のとおり米沢藩士市川氏、高崎藩士山本氏の事例によって、その展望を示すことができた。この点については今後もさらに多くの事例から検討を加える必要がある。その際に注意すべき点は、近世以降の史料についても積極的に収集する必要があることであろう。今回調査した資料の中でこのことを象徴的に物語っているのが、白河藩士市川氏の家伝文書である。この文書群は現在6通が伝えられているが、『戦国遺文武田氏編』ではそのうち武田氏発給文書の3通を収録し、『山梨県史資料編』ではそれに徳川家康発給文書の2通を加えた5通を収録している。両書の収録範囲外である寛永5年10月2日付丹羽長重判物によって、市川氏の子孫に白河藩に仕官した人物が存在していたことが明らかになった。このような事例の蓄積をさらに進めることで、特に滅亡した大名家臣の動向と、彼らどのように文書を伝えてきたかという点について、具体的に解き明かしていくことを今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①海老沼　真治「武田・徳川氏の今川領国侵攻過程－身延文庫「科註拾塵抄」奥書の検討から－」（『武田氏研究』51号、査読有、2014年12月、pp.1-15）

②海老沼　真治「市河家文書「古状共写」について」（『山梨県立博物館研究紀要』第9集、査読無、2015年3月、pp.53-62）

③海老沼　真治「新収集資料紹介「武田勝頼書状」「徳川家奉行人連署状」」（『山梨県立博物館研究紀要』第9集、査読無、2015年3月、pp.49-52）

④海老沼　真治「川中島合戦と信越国境」（『地方史研究』383号、査読無、2016年10月、pp.24-28）

⑤海老沼　真治「《資料紹介》「武田二十四将展」展示資料の法量詳細」（『山梨県立博物館研究紀要』第11集、査読無、2017年3月、pp37-46）

⑥海老沼　真治「第四次川中島合戦直前の武田氏－新出の武田信玄自筆書状から－」（『戦国史研究』75号、査読無、2018年2月、pp.34-35）

〔学会発表〕（計1件）

①築城450年 飯山城シンポジウム（2014年10月4日、於飯山市民会館）、海老沼真治「御館の乱・甲越同盟と武田氏の飯山支配」

〔図書〕（計 3 件）
①和根崎　剛編『資料で読み解く真田一族』（郷土出版社、2016 年 2 月）、海老沼　真治「海野平の戦いと上州逃亡」pp.56-61、「信玄との出会い」pp.61-67、「幸村と武田信繁」pp.86-87
②山梨県立博物館編『開館 10 周年記念特別展　武田二十四将―信玄を支えた家臣たちの姿―』展示図録（2016 年 3 月、136 頁）
③安中市学習の森ふるさと学習館編『企画展山本菅助―真下家所蔵文書の発見―』展示図録（2017 年 12 月）、海老沼　真治「山本菅助に関わる新出史料の調査と概要」pp.5-8、「武田氏滅亡後の山本氏―高崎藩士への道程と由緒の形成―」pp.106-112

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
山梨県立博物館 HP>活動紹介>外部資金による研究（戦国大名家臣の関係史料収集と近世的展開に関する基礎的研究）
URL:
http://www.museum.pref.yamanashi.jp/2nd_news_kaken_ebinuma_02.html

６．研究組織
(1)研究代表者
海老沼　真治（EBINUMA, Shinji）
山梨県立博物館・学芸課・学芸員
研究者番号：２０５７４１５６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
平山　優（HIRAYAMA, Masaru）
丸島　和洋（MARUSHIMA, Kazuhiro）
佐野　亨介（SANO, Kosuke）